

本当に大切なことは数字に見えているものばかりではない



川野 祐
経済学部講師
かわの ゆうじ

一昨年、最年少の20代で就任。限りなく学生に近い先生の目にもうの学生が抱える悩みが映った。まどめる、こなすのは上手だが、自分から行く気概や競争心が皆無。一方で、時まさにITバブルの隆盛期。華々しくメデイに登場する成功者に憧れを重ね、ホリエモンのようにになりたい。「コンサルタントになつて稼ぐ」と口にする学生に危機感を募らせた。「ものを造る人がいるから経済が成り立つ」という経済の原点を知らしめ、他大学と交流し意識し合うことが必要と判断。ものづくりの現場を見学させ、他大学と合同ゼミ・合宿を行い、経済学検定のゼミ生全員参加を決めた。

経済学検定(E・RE)とは経済学の知識を測る試験。自分の力を知って客観的な判断をし、負けたくないという意識を持つて欲しい。授業では発表者だけでなく、全員にレジュメを課す。毎週マイケットレポートを宿題にする。受け身でない、厳しさの中に身を置いて切磋琢磨して欲しいからだ。

しかし最も「だわるるのは」数字に出てこないことを大切にすること。ものの見方だ。「社会はテキストとおりではない。テキストには書かれていながら略された社会の在りようが分かるかどうかが重要。与えられたことを齧呑みにするな。思い込みを排除せよ」と先生。そのために心理学や歴史書も読ませる。「大学は学ぶことを学ぶ場所。経済学と言えど、大切なものは数字で見えているものばかりではない。目に見えない達成度と目に見えないものの意識をバランスよく導くことがカギを信じている。

借りものでない、自分の言葉で語ろう



菊地 章太
ライフデザイン学部教授
きくち のりたか

専門は哲学と宗教学で、呪いや悪魔払いなども研究テーマ。日本ではエクソシストという映画の中の世界。欧米では病院に行っても治らない病気を治すのに悪魔払い師、エクソシストを頼ることも。カウンスリングの発達した現代になつても科学では切り込めない心の闇の部分を精神科医と協力し治療するのは宗教による「ころが多い」と語る。

一見、スポーツ健康科学とは距離があるように見えて、根本で繋がる。つらさや弱さを抱えた人に、眼差しを向け、どれだけ向き合えるか。強く生きるだけでなく、宗教観を通して、人間の迷いや弱さを理解すること。必要。体育の教師やインストラクターを目指す学生にいう。逆上がりができない生徒と一番仲良くなれる先生になつてほしい。スポーツで故障したり、挫折を経験して痛みを知っている学生は少なくない。将来どんな道に進もうと、つらさがわかるのは強み」と言う。

だからこそ、言葉や感性を大切にしたいと考えている。ふと耳にしたメロディが心にしみたり、誰かの何気ないひと言にグサッと傷ついたりするのはその瞬間、感性が研ぎすまされているからだとか。鈍く長いつつある現代人こそそんな感性を持っているが、時に感性の鋭さ故に言葉や視線が心に突き刺さることもある。言葉が人を殺してしまふこともあるから言葉はとても大事と菊地先生「よく、思いを言葉にできないと言われど、拙くても自分で考えて語れないと人の心に届かない。言葉にする訓練をしよう」。

実験台の前に立って実験する以外、新しい発見をする方法はない



道久 之
生命科学部助教授
どうきゅう のりゆき

「実験なんて上手くいかないことの方がほとんど。だからこそ、試行錯誤を経て実験が成功し、新しい何かを発見できたときには、まさに、血湧き肉踊る感じの喜びがあるんですけど、ずっと道久助教、ヒトや一般的な動物の生育環境から逸脱するような極限環境条件下で生育する「極限環境微生物」が研究テーマ。特にシンナー、トルエンといった有機溶媒に耐性のある微生物が専門だ。人や環境にいい影響を与える有機溶媒も、特殊な微生物を用いることにより、医薬品などの生産に使用することができるとのこと。この性質は、原油流出事故の際の環境汚染の緩和などにも大いに役立つ。

研究の柱は実験。実験台の前に立って実験する以外、新しい発見をする方法はないと言いつつ、準備に時間がかかるし、いつ終わるかも分からない。ましてや失敗すればやり直し。やらせられる感が強い学生の知的好奇心をいかに引き出すか。自らの課題に据え、「実験の醍醐味を知り、発見の喜びを感じて欲しい」と願う。先生自身もひょんなことからおもしろい菌を発見できた経験が、研究の道に向かう原動力になった。

「思い通りの結果が出なくても、そこから新しい発見が生まれることもある。失敗しなれば次に進めない。食品や薬品、環境などの分野で微生物の果たす役割は注目されている。目に見えない小さな微生物は無数の可能性を秘めている。大発見の可能性は、誰にでも広がっているんですよ」。